

なんだか疲れたね

崖の上でピクニックをしよう

きみの気持ちなんかわからない

それでも空を眺めて同時に

「きれい」なんて囁けるから

崖の先っぽの一輪の白い花を

ハイハイしながら取りに行く

赤ん坊の頃の記憶はないけど

「なつかしい」という錯覚はできるから

こんな大自然に囲まれているのに

携帯電話を手放さないでいるきみが

やさしい宇宙人に見えた

肘と膝が擦れて血が滲み

痛みと快感の狭間で花びらがゆれて

すこしうんこもしたくなって

雷が鳴って

夕立がはじまる

きみの気持ちなんかわからないから

きみのことがどこまでも好きだ

泥が跳ねて目に刺さり

ハイハイしながら宇宙を漂う



space turbo

桑原 滝 弥

あとすこし
あとすこし

たぶんあの一輪の白い花を取り損なうフリをして

崖の真下へと飛び込めるのだけど

ほんとうはそんな勇氣なんてないから

きみが宇宙船を呼んで

連れ去ってくれるのを待っている

それからしばらくの間

一〇〇年くらい

きみの気持ちがすこしだけわかるまで

きみのことが好きよりもっと

大切におもえるまで

空を切り裂いて落下する携帯電話を二人して

「うつくしい」と見つめあえるまで

なんだか疲れたね

疲れたけどいいね

次はどここの星へ行こう

また、ここで会えるといいね